

創世ホール通信 No. 292

催し案内 + 文化ジャーナル
2019年5月1日発行 ■北島町立図書館・創世ホール
電話：088-698-1100 ファクシミリ：088-698-1180
〒771-0207 徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91



創世ホール名画鑑賞会30日 日日是好日

5月18日(土)

2回上映 ①午前10時30分～ ②午後2時～



©「日日是好日」製作委員会

会場：3階 多目的ホール

入場料：大学生・一般 前売1,000円(当日1,300円)

小・中・高 当日のみ1,000円

シニア(60歳以上)当日のみ1,000円

上映作品：「日日是好日」

(2018年、日本、100分)

原作＝森下典子『日日是好日「お茶」が教えてくれた15のしあわせ』(飛鳥新社)

出演＝黒木華・樹木希林・多部未華子 他

監督＝大森立嗣

制作著作＝「日日是好日」製作委員会

主催：創世ホール名画鑑賞会実行委員会

■日日是好日—それは、お茶が教えてくれた幸せ■原作は、人気エッセイスト・森下典子が20年にわたる茶道教室での体験を瑞々しく綴ったロングセラー。■お茶の稽古を通して、ものの見方や四季や身の回りの変化の感じ方など、何かが少しずつ、確実に変わって

いく…。茶道経験者の枠を越え、多くの読者に感銘を与えてきた名著が、鮮やかに映像化。■主人公・典子(黒木華)は、母の勧めでいとこの美智子(多部未華子)とともに茶道教室に通い始める。師匠の武田先生(樹木希林)に導かれ、慣れない作法に戸惑いながらも稽古を続けるが…■きらびやかな青春の日々、就職・結婚などの人生の岐路における選択、そして別れ…等身大の女性の人生を通して生きる事の喜びを描いた一期一会の感動作！多数ご参集ください

ペルヴァンシュ吹奏楽団 Familyコンサート

5月19日(日)

午後2時開演(午後1時30分開場)

会場：3階 多目的ホール 入場無料

主催：ペルヴァンシュ吹奏楽団

(野田 ☎090-8976-6123)

子どもから大人まで、家族で楽しめるコンサートです。

第2回・咲声café

6月22日(土)

午後2時開演(午後1時開場)

会場：3階 多目的ホール 入場料4,000円※

出演：豊永利行(声優)・矢野奨吾(声優)

問合せ先：咲声café (<http://sakikoe.jimdo.com>)

■プロの声優の演技とトークを楽しめる朗読会。■演目は咲声caféオリジナルシナリオになります。

※チケット事前購入制となります。上記URLよりお申し込みいただくか、平惣徳島店・川内店でお買い求めください。北島町立図書館では扱っておりません。ご注意ください。

季節のように生きる。

一期一会の感動作がここに誕生。

これこうです

黒木華 樹木希林 多部未華子

原簿：森下典子『日日是好日「お茶」が教えてくれた15のしあわせ』(飛鳥新社)

監督：大森立嗣

制作著作：「日日是好日」製作委員会

主催：創世ホール名画鑑賞会実行委員会

追悼★小池一夫先生

著名な漫画原作者が北島町に来たときのこと

北島町立図書館協議会委員長 創世ホール・サホーク★小西昌幸

■著名な漫画原作者の小池一夫先生が2019(平成31)年4月17日にお亡くなりになった。享年82。小池先生には、2014(平成26)年2月9日に北島町立図書館・創世ホール3階多目的ホールでご講演いただいている(演題「私が『子連れ狼』に託したもの～拝一刀と大五郎の伝説」、来場者250名超)。

■最近ではトキワ荘マンガ家の長谷邦夫先生が亡くなっており、1月号で追悼文を書いたばかりだ。創世ホールの講演会に登場いただいた方が少しずつ天国に旅立たれていて、やはり寂しい(この20年の内に種村季弘さん、柴野拓美さん、竹内博さん、九條今日子さんが他界。闘病・療養中の方が数名)。

■小池先生は創世ホール講演会の歴代講師陣の中でもひとときわビッグネームだった。「文化ジャーナル」では講演会に前後して3号連続で催しに関する文章(事前広報と終了報告。小池一夫さんと「子連れ狼」論や講演会こぼれ話)を掲載した(2014年1月号～3月号)。それらは北島町のHPで読めるので(「文化ジャーナル」で検索)、未読の方や関心ある方は合わせて目を通されたい。

■以下の文章は、基本的に初披露のエピソードを綴って、北島町講演会時の小池先生の思い出を偲ぼうとするものである。やむを得ず、既発表の文章と一部重複する部分もあるが、ご容赦を乞う。

■小池一夫さんを講師にお願いしたらどうかというのは、2010年ごろから池田憲章氏から言われていたことだった。思案の末、「子連れ狼」にしばった内容で行きたいと考えた。京都国際マンガミュージアムでも小池先生はトークをされているので、旧知の同館の伊藤研究員にも相談した。小池先生は物凄くトークがお上手ですよという助言をいただいた。

■こちらの考えを固め、腹をくくって依頼状をお送りしたのが2013年7月。投函してからの数日間、大変緊張したが、秘書の岩脇要介さんから日帰りを条件に、承諾のご連絡をいただいたときは安堵した。

■岩脇さんから提示された条件は次の通り。講演当日、2月9日の徳島での小池先生の滞在時間は6時間とする。午前11時徳島空港着、午後5時発の飛行機で羽田に向けて出発という段取りだ。午後4時会場撤収ということになるので、講演開始は午後1時30分、サイン会の類は一切なしという設定にした。創世ホールがかつて経験したことがないスケジュールだった。

■「文化ジャーナル」2014(平成26)年1月号に「子連れ狼」の作品世界についての文章を書き、印象に残るいくつかのエピソードを紹介した。その中に、子分を従えたいなせな女渡世人が関わる美しいエピソードが2つあり、あらずじ紹介の文章を、気合を込めてねじり鉢巻きで書いた。それを読んだ古川保博町長が、ある日の夕方電話をかけてきて「小西君。今日、お前の文章を読んでわしは3回泣いたわ」といった。町長は女渡世人が子連れ狼親子の逃走の手助けをし、あえて命を落とす切ないエピソードに落涙したのだ。勤務時間にこんな励ましの電話をかけてくれる人情味のある町長に仕えて、私は幸福と喜びを感じた。後日、私は当該エピソードの収録されている「子連れ狼」のDVDを町長自宅に届け、お貸しした。

■私は潰瘍性大腸炎という難病指定を受けており、月に一度、徳島市内の

U内科・胃腸科という病院のお世話になっている。その院長先生に講演会のお話をしたら、「わしは『子連れ狼』の漫画を全部持っていた。最終回には泣いた」と述べられた。先生は講演会に来て下さった。千葉県松戸市の森優子さん、鈴木之彦さんも駆けつけて下さった。ありがたかった。

■古川保博町長は、有名な小池さんが来るというので張り切っていたが、講演会の日には愛媛松山でどうしても会議があり、主催者あいさつを終えたら直ちに高速道で愛媛に向かうという段取りだった。

■この年2月に大雪が相次いだ。毎週末に首都圏に大雪が降り、各種交通機関のマヒが続出という事態になった。講演会前日の2月8日も関東方面が大雪に見舞われ、飛行機の欠航が相次ぎ(徳島→羽田間も欠航)、非常に気をもんだ。

■前日は飛行機が飛ばなかったので、日帰りで正解だったのだが、これもハラハラドキドキの展開になったのである。小池先生は第2便の飛行機で徳島入りだった。始発便は雪のため欠航したので、この便でよかったのだが、雪のために出発が遅れた。それも2時間以上。

■最初の岩脇秘書からの電話は、小池先生が機内に無事乗り込みました、というものだった。その後、雪が降り続いており、飛行機がまだ飛び立たないようだという報告と、栄養補助食品+2種類のミネラル・ウォーターのペットボトルを用意するよう品目の指示があった。

■私たちは30分おきにやり取りし、状況確認と協議をした。当時私は町教育委員会事務局長という肩書で、北島町立図書館・創世ホールの館長は藤高繁利氏だった。藤高館長とも頻りに連絡を取った。指定されたミネラル・ウォーターの1つの銘柄が判然とせず、相談すると外国のものですよということだった。空港に向かう途中、松茂町のスーパーマーケットに立ち寄り、栄養補助食品とミネラル・ウォーター、寿司の盛り合わせを買った。だが、外国銘柄のミネラル・ウォーターが見当たらない。仕方がないので、空港に向かった。その銘柄のペットボトルは空港の売店で買った。

■飛行機到着は午後1時を過ぎることが確実となり、藤高館長と協議して開演時間を遅らせることにした。そして、来場者には「子連れ狼」のDVDを見ていただくことにした。図書館カウンター前のガラスケースには「子連れ狼」のDVDなども展示していたので、その中から先の女渡世人が登場する「あんじゃとあねま」というエピソードを上映してもらうことにした。午後1時15分から上映開始しそれが終了するのがちょうど2時頃だから、ぎりぎり小池先生も会場入りできると踏んだのだ。

■午後1時過ぎ、飛行機はついに到着した。長身の小池先生の姿を見つけたときは、もう催しの半分が達成できたような安堵した気持ちになった。空港には古川町長も来て、小池先生にあいさつした。町長はそのまま愛媛での会議に向かった。

■小池先生は昼食を召し上がっておられなかった。会場に直行する車中の後部座席で、「何も食べていないので、失礼しますよ」とおっしゃって、こちらが用意した栄養補助食品と天然水をめしあがっていた。

■講演会は、小池ワールド全開の見事なものだった。拝一刀(おがみ・いっとう)の名の由来は、「オオカミ頭」をもじったものということ。そして橋幸夫さんの歌う有名な主題歌誕生のエピソードは、愉快だった。大人気となった「子連れ狼」の歌を作ろうという話があって、有名作曲家の吉田正さんとお酒を飲んだ。この種の企画は水物だからということでも小池先生は、そのままほったらかしにしていた。そして、あるホテルで原稿書きのため缶詰めになってうなづいてるとき、吉田正さんご本人から直接電話があった。前に作詞の話をしたが、もう完成しているかいという趣旨の電話

だった。小池先生は、あせって「はあ、だいたいできています」とか何とか言ってやり過ごそうとする。すると吉田さんは、じゃあ今電話口で言ってみてよ、と言う。丁度、その日雨が降っていて、窓にしがすが落ちていた。それでとっさに「しとしとびっちゃん、しとしとびっちゃん」と小池先生は言った。吉田さんは、なんだかおかしな出だしだなあ、でそのあとはどうなの、と食い下がる。小池先生は、電話口ではアレなので、吉田先生、1時間以内にファクシミリで書いてお送りしますよ、と言って受話器を置く。そして大急ぎで仕上げたのが、あの有名な歌なのだった。あの出だし部分をどう処理するのだろうか、と小池先生は楽しみにしていた。「吉田正先生は冒頭部分を子どもたちのコーラスで処理していた。全く意表をついて、さすがだと思いました」といった。そして、その吉田先生が最近亡くなり残念だというくだりで、言葉が詰まった。少し声が震えて、小池先生は泣いていて、会場は静まり返ったのだ。胸が熱くなるエピソードの披露だった。もちろん、すぐ立ち直り小池先生はトークを続けられた。

■もう一つ、印象に残った逸話。『子連れ狼』は英訳されて海外市場でも大ヒットした。小池先生は、米国でのコミック・コンヴェンションに招かれた。その時、日本刀を用意しようということになって、ものすごく苦勞して持ち込み手続きを取った。文化庁か文部科学省か、しかるべき機関に申請をして承諾を得た。ところが日本を出国できたが、今度は米国の入国手続きの際、足止めを食らうことになった。米国の空港で担当官と1時間も揉めたが、らちが明かない。そのうち、ミスター・コイケ、お前はいったい何者なのか、ということになって、そこで初めて「子連れ狼」の原作者本人であることが相手に伝わった。そのとたんに入国管理官の態度が豹変し、とても親切になった。担当官は英語版『子連れ狼』を愛読していたのだ。そして同僚を呼んで、紹介され、サインをねだられた。日本刀の持ち込みはOKとなり、小池先生はコミック大会で大歓迎された。先生は実に楽しそうにお話しされた。

■飛行機到着が大幅に遅れた関係で、小池先生の帰りの飛行機の出発は最終便になった。時間に余裕ができたので、サイン会をお願いすると快くOKが出た。雪のためにハラハラしたが、来場者には思いがけない大きな贈り物となったわけだ。サイン会が終わり、会場撤収し、空港に向かう途中、どこかで食事しましょうか、と小池先生にお聞きしたが、先生は「いや、このまま空港に行ってください」とおっしゃった。そして、僕は空港で時間をつぶします、小西さんもお疲れでしょうから、お気になさらずお引き取り下さい、と言われたのだ。小池先生は若い頃、流行作家の山手樹一郎さんのところに出入りしていた方だから、様々な苦勞をされたはずだ。裏方の者への心配りをされたのだと思った。

■『子連れ狼』のラスト。拝一刀が倒れ、大五郎は涙をぬぐって折れた槍を抱えて、柳生烈堂に突進する。烈堂はそれを受け止め絶命する。物語には、その最終シーンから続く『新・子連れ狼』があり、大五郎は薩摩出身の剣士・東郷重位(とうごう・しげかた)とともに旅に出る。そして將軍暗殺を企てる敵と戦うことになる。大五郎登場作品には、そのさらに続編もあり、『そして子連れ狼 刺客の子』というその作品は、伝奇モノで、妖怪変化の類が登場する活劇作品だった。私は、この路線も面白いと思った。だが、この作品はついに未完となった。考えてみると、その後の大五郎をめぐるお話の感想を、結局私は小池先生にお伝え出来ないうままだった。あの日は、本当に大変だったが思い出深いものとなった。講演会の後、私は個人的に小池先生と秘書の方にあてて、焼酎をお送りした。あれから、もう5年になる。小池一夫先生のご冥福を、心からお祈りいたします。(20190505脱稿)